

別紙解答用紙に解答すること。

2 ページ中の 1 ページ目

問 あなたは自身の大学生活において、スポーツとどのように向き合おうと考えていますか。(1)および(2)の2つの記事の内容を参考にしながら、文学部での学びとの関係、および自身のこれまでのスポーツ経験を踏まえ、800～1,000 字で論じなさい。

(1) (教育の小径) 体育大、部活動の指導者養成へ動き活発

部活動の地域移行に伴い、課題となっている指導者養成を「使命」ととらえる体育大学の動きが活発だ。大阪体育大は2023年から、「運動部活動指導認定プログラム」を開講する。学校外の指導員や、移行先の地域クラブのコーチとしての活動を希望する社会人を対象とする講座だ。

学ぶのは指導スキルだけではない。体罰・ハラスメント根絶に向けた考え方や事故予防、学校教育への理解を深める科目など、安全で主体的なスポーツ活動に向けた内容を網羅する。68 時間分を4カ月間。受講はオンラインか対面を選択できる。これまでに全国の男女166 人が修了。指導歴のある103 人が学び直しの場とし、指導歴がなかった63 人は新たな道を切り開く機会とした。

「成長期の体作りや非常時の対応など、勉強になりました」

そう話すのは、プログラムを受講した長崎県長与町の会社員、嶋田敬三さん(50)。15年から地域の中学陸上部で外部指導者を務め、23年に同町で土日の部活動が地域移行されてからは、受け皿となった地域クラブの指導者として活動している。「『強くなりたい』という気持ちを引き出すことを意識してきましたが、それこそがアスリートファーストだという確信を、受講して強められました」

東京女子体育大は今年度から、学生向けに「部活動マネジメント演習」を開講した。東京都の府中市、日野市、国分寺市、立川市、国立市などと連携。学生は、受け入れ先の中学校の部活動に通い、実技指導のほか練習準備などのマネジメントも体験する。

競技力が高い学生には専門性も期待でき、5市からはバスケットボール、陸上など12競技86件のニーズがあるという。「これまで学生は卒業後、トップスポーツに興味が行きがちだったが、裾野の指導に目が向くことも期待できる」と豊岡弘敏教授。競技力向上だけでなく体育大学の取り組みは部活動改革が生むプラスアルファとなる。

出典：『朝日新聞』2025年4月23日夕刊（著者は編集委員・中小路徹氏）

（文意を損ねない範囲で改行の場所を一部変更した。） 承諾番号：26-1092

朝日新聞社に無断で転載することを禁じる。

別紙解答用紙に解答すること。

2 ページ中の 2 ページ目

(2) フィンランド流コーチ術 日本アスリートのメンタル・慣習変える哲学

東京のフィンランド大使館で「フィンランド流コーチ術の秘密」という催しが 11 月 17 日にあり、アイスホッケー日光アイスバックスのイエスパー・ヤロネン・コーチ、バレーボール東京グレートベアーズ (GB) のカスパー・ヴオリネン監督、バスケットボール横浜ビー・コルセアーズ (BC) のラッシ・トゥオビ監督の話を聞く機会があった。

まず驚いたのは、みんな、とにかく若いこと。ヤロネン・コーチは 31 歳、最年長のヴオリネン監督で 41 歳。フィンランドではコーチ学を大学などの教育機関できっちり修め、それを現場で先達について試行錯誤しながら磨き上げ、自らのスタイルを確立するサイクルが回っているのだろう。

3 人の現在進行形の日本体験記に興味深い。ヤロネン・コーチは「努力を惜しまず規律を重んじるのは想定どおりだったが、驚いたのは日本の選手のスキルの高さ」。ヴオリネン監督は「いろんな国で指導してきたが、もっと練習しろと言わなくてすむのは日本くらい。逆に不必要な練習はするなと言わないといけない。

苦勞していることもある。ヴオリネン監督は大学バレーについて「競技レベルがすごい」とたたえる一方で「学校の先輩と後輩」に象徴される、コート外の上下関係が競技に持ち込まれるのを戒める。フィンランドでは監督と選手、選手と選手の関係はもっとフラットでオープンだ。

ヤロネン・コーチの「日本の選手はすぐに『はい』と答えるけれど、実は分かっていない」という発言も学校や職場の日常的な光景を思わせて微苦笑を誘われた。トゥオビ監督は「みんなの前でノーと言いくいのか。それで小グループに分けて話し合う場を設けるようにした。選手同士なら意見が出やすいと考えて」。

トゥオビ監督はスポーツにおける「すみませんカルチャー」を問題視する。競技中にミスをした選手が「すみません」「ごめんなさい」を口癖のように連発してしまう。「スポーツで大事なのはフィードバックではなく、フィードフォワードの精神なのに」。すみません、悪かったです、では気持ちは後ろ向きなまま。それよりも「次はこうしよう」と声に出す方が「次」も「明日」も見えてくる。

話を聞きながら「サッカーみたい」と感じたところもあった。ヴオリネン監督が選手に対して「もっとクレージーになろう」と呼び掛けていると語ったときだ。「大きな枠組みの中でもっと選手を自由にプレーさせたい。その枠をどう設けるかはすごく重要だけれど」。選手をアバターのよう動かそうと躍起になっている昨今の指導者へのアンチテーゼと受け取った。

三者が三様の考えを述べながら、通底するのは自分に矢印を向ける姿勢だった。

「チームのコンセプトを理解できていなかったらそれはコーチの責任だ」「フィンランドのコーチは自分が一番じゃない。チームが一番。コーチはチームにサービスを提供する立場」といった発言の潔さ。自分の手柄、功名心にはやって選手、特に子供を怒鳴りまくるコーチとは対極の姿だろう。

チームワークを大事にしながらいを尊重し埋没させない彼らの哲学は、スポーツのコーチという仕事にふさわしいようにも感じた。フィンランドと聞くとノルディックスキー、アイスホッケー、サウナ、サッカーのヤリ・リトマネン、F1 のミカ・ハッキネンくらいしか思い浮かばない我が身を大いに反省する 1 日となった。

出典：『日本経済新聞』2025 年 11 月 27 日（著者は編集委員・武智幸徳氏）（文意を損ねない範囲で改行の場所を一部変更した。）許諾番号（受付番号）：002820

以上